

春深く

久保田万太郎

青空文庫

嘗て磯部というところへ行つたことがある。——上州のあの温泉の……

二十九の春とおぼえている。——駒形にまだいた時分だ。

みつともないから事の次第はいわない、とにかく、その時分、いまにして思えば空な話。

——らちくちもない夢のような話をたよりに、わたしは、白痴みれんな毎日を送っていた。

——寂しく、味気なく。——何をする張合もなく陰気そのもののような毎日を送っていた。

その間で、ふっと、東京にいるのがいやになった。——どこかへ行くことだ。——平生

どこへも出たことのない奴がわけもなくそう思った。

で、直ぐ、そのつもりにした。外へ出たついでに旅行案内を買つて来た。

磯部を選んだのは、島崎（藤村）先生のたしか「芽生」のなかにそのことが出て来る

のと岡本（綺堂）さんが、その少しまえ、そこへ暫く行つていられたというのを聞いたの

と、そうした二つの理由からだつた。——島崎先生と岡本さんの好みに合うところならど

う間違つても大丈夫だ。——一人でそうきめたうらには、安中だの松井田だの、円朝の

『榛名の梅が香』に出て来るそのあたりの、寂しい火の消えたような光景の自らわたしに

さしぐまれるもののがあつたことは勿論だ……

汽車の中でよむ二、三冊の本と、原稿用紙と、万年筆と、外に一つ二つの手廻りのものと、荷物といつてはそれだけだった。籠一つでことは足りた。——それを下げて四月の末の曇った午後、わたしはぼんやり一人で上野を立った。高崎で乗りかえて、五時ごろ、磯部へ着いた。

そこで下りたのはわたしだけだった。——切符をわたしで思った以上に小さい、人けのないガラシとした停車場の構内を出ると、繁り切った桜の嫩葉わかばの、雨を含んだ陰鬱な匂がしずかにわたしに迫った。——あたりはもう灯火のほしいほどに暮れかけていた。

「鳳来館まで。」

二、三人、わたしをみてそばへ寄つて来た車夫の一人にわたしはいった。

鳳来館がどういううちだかということをわたしは全く知らなかった。——ただ、磯部で、最も古く最も大きい宿屋だということを汽車の中で聞いただけだった。——それも直接に聞いたのではなく、大宮から乗つて来た二人づれの老人の、そのあたりのことを互にいろいろ話合うのを、ゆくりなく、側で、聞いただけだった。

だから、みるまで、蓬萊館と書くのだとばかりわたしは思っていた。——鳳来館だとは夢さら思わなかった。

俤^{くるま}は、両側に、不揃いな家の退屈にならんだ石坂みちをぐつぐつ下りて行つた。みちに沿つて水のながれているさまが、そう思つてみれば、古い温泉の町らしい感じをどこかにみせていた。――が、そこには、残る花の風情もなく、十分ほどで、わたしは、三階建の大きな、纏^{まと}まりのない、いかにも宿屋宿屋したつくりの汚れ腐つた玄関のまゑに下された。「こんなうちか？」

すぐ、そのとき、わたしはそう思つた。――酷^{ひど}くあての外れたのを感じた。最も古く、最も大きいという意味を自分にばかり引きつけて解釈したわたしは、それとは似ても似つかないものを所詮^{しよせん}は空想していたのだつた。

案内されたのは三階の何番かだつた。――そこへ行くまで、薄暗い廊下を、やや暫く右に折れたり左に曲つたりした。――せめてもの満足は客のすくないことで、同じように並んだ隣の室^{へや}にも、その隣の室にも、人のいるらしいけはいがなかった。――空世辞^{からせじ}をいう番頭のいなくなつたあと、わたしは、障子の外に出て、欄干の下をみ下した。――玄関のまゑの植込に、遠く、ぽつつりと一つ浮いた灯火の、しずかな、無心ないろが悩ましい東京のほうへわたしを誘つた。

夕暗は、濃く、泪^{なみだ}ぐましく罩^こめた。

湯に入つたあとで、いたずらに皿かずばかり多くなつた膳の前にすわつた。川瀬の音が雨のように近く聞えた。——わたしはぬるい酒を我慢して飲んだ。

と、階下の、離れた座敷のほうで「カチユウシャ、可愛や、わかれのつらさ」と大ぜいでうたいはじめた。——訊くと、女中は、信州の小学校の先生たちの会があるとこたえた。

その晩、早くねたわたしは、あくる朝、てきめん覲面に早く眼がさめた——勝手の知れないまま、しばらく床の中でもじもじしていたものの、辛抱し切れなくなつてわたしは起きた。——窓の雨戸をあけると、昨夜あれほど近かつた瀬の音が、しずかに知らないふりに遠退とおのいていた。

顔を洗いがてら湯に下りた。昨夜はそれほど思わなかつたが、明るいなかでみると、湯槽ゆぶねも古く湯の色もふかく濁っていた。——それには、昨夜はだれもいなかった湯槽の中にながしのうえに、みも知らない人たちが、仲間同士それぞれに固まって、高ごえにわけもなくわめき合っていた。——言葉から推して東京でないことは直ぐに分つた。

からだを拭くのもそこそこにわたしは部屋にかえつた。

朝の膳も昨夜に劣らないほどの品かずを持つていた。ところ狭いまでにいろいろ皿が並

べ立てられた。が、毒々しい色の刺身だのこちこちに固まったフライだの、水のように冷めたい吸いものだの——そうしたもののばかりのどこに箸をつけていいか分らなかった。——わたしは心もちは白け返った。

食後わたしは外に出た。——田舎田舎した好み、並べた石にきどりをみせた植込に躑躅のあざやかに咲いたのをみながら門を出て、足の向くなり、昨日俤でとおったみちを、逆に停車場のほうへあるいた。——空は昨日と同じように曇っていた。

わたしは郵便局をさがした。訊くまでもなくすぐに知れた。——電報をうつつもりでなかに入ると、わたしよりもさきに、その窓口に四十恰好の、かっぱくのいい、髭を蓄えた、どこかの宿の泊り客らしいぢえの紳士が立っていた。

「はて？」

わたしはわれにもなく注意した。みないふりにしげしげみもった——昨日わかれて来た「東京」の匂がそれほどもうわたしにめずらしかった。

郵便局を出てから碓氷川うすいがわのほうへあるいた。——曇ったままにしてうす日がさして来た。——だんだん水の音の高くなると一しよに家並が尽きて、しらじらと冷めたく展ひらげる河原の光景が間もなくわたしのまえにあった。

話はこれだけである。——その日の夕方、わたしは、そこを立って東京へかえった。

何だ、らちもない。——読者はおそらくそういうだろう。——わたしの思わせぶりな書出しにさそわれた読者はおそらくそういうだろう。——が、それに違いないものは仕方がない。

もし三、四年まえだったら、わたしは、ことのついでにこれを小説にしたことだろう。

——小説にしないまでも、碓氷川の瀬の音の、更けて、いかに悲しくねぎめの枕に響いたかということを、山鳥の尾のながながしく、掻口説かきくどいたことだろう。——残念なことに、そうしたたんねんさを、わたしはすでに失った。……

これを要するに、島崎先生と岡本さんの好みにあうところならと思ったのがそもその間違이었다。島崎先生なればこそ、岡本さんなればこそ、それぞれ折合えるものもみ出されたのである。——三十まえの、なま若い、料簡りようけんのきまらない、たじれ切ったわたしにはあたまで無理なところだった。——あまりに乾きすぎ、あまりに沈みすぎた——たとえば風の絶えた墓原のようにわたしには心細い場所だった。

ほんとうの一日一と晩。——時間にして二十四時間とわたしはそこにいなかった。——

でもわたしには、四日と五日いたほどに寂しく感じられた。出来たら十日と半月いて仕事の一つもしてと思つて持つて行つた原稿用紙を入れたままの籠を下げて、その晚上野の停車場の改札口を出たとき、そのあたりの射るようにあかるい灯火のいろがわたしには全かけかまひのないように冷かだつた。

「温泉の町の磧かわらに尽くる夜寒かな」——それから四、五年して、ある人のところで、「夜寒」という題を課せられたとき、わたしは、こうした句をつくつた。——磯部のことをいうまでもなく思い出したのである。——それが四月の末であつたに拘かからず、わたしには、日を経るにつれてそのおもいで、なぜか秋のいろに寂しく染められて行くものがあるのである。

青空文庫情報

底本：「日本近代随筆選 1 出会いの時〔全3冊〕」岩波文庫、岩波書店

2016（平成28）年4月15日第1刷発行

底本の親本：「久保田万太郎全集10」中央公論社

1975（昭和50）年

初出：「都新聞」

1924（大正13）年5月2、3、6、7日

※「好みに合う」と「好みにあう」の混在は、底本通りです。

入力：法川利夫

校正：岡村和彦

2017年3月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春深く

久保田万太郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>